

古くて新しい国 モンゴル

木原 光資 | Kihara Koshi

財統計情報研究開発センター理事



■1975年三井銀行（現三井住友銀行）、石油公団、参議院議員公設秘書、総務庁（総務省）大臣秘書官を経て、現在 青少年国際交流推進センター理事、東都交通株式会社取締役。92年より現職。

1. 日程

平成17年9月7日から10日にかけて、モンゴル国国家統計局と統計技術協力協定を結ぶためにモンゴル国を訪れた。

出発日に台風14号の上陸と重なり、そのせいか飛行機が欠航。1日半とせわしない滞在となってしまう、行動範囲も首都ウランバートルと中央県に限られたものとなった。

今回の協力協定の目的、趣旨等については本誌の別稿で書かれるので、当地で見聞きしたこと、自分なりに感じたモンゴルをお伝えしたい。

2. モンゴルでの第一歩

自分は訪問国の空港に到着した直後の第一印象を大切にしている。モンゴル・ウランバートル国際空港は日本の地方都市空港よりローカルだ。しかし、出迎えの人々の表情や雰囲気は温かいものを感じさせた。空港から首都ウランバートルまで向かうが、途中はほとんど草原であ

る。畑も農作地も工業団地も見当たらなかった。東京に比べると本当に空気がきれいで、呼吸も楽である。澄んだ空気の中に真っ青な空と全く何もない草原の中に立つ広告の看板が異常に目立った。

3. 自然風土

この草原は砂漠性草原地帯と言うそうだ。南東には広大なゴビ砂漠を有し面積は157万km²、日本の4倍の面積がある。しかし、人口は約250万人と福島、長野、新潟県程度であり、都市部を除いたモンゴル平原の人口密度は大変低い。国の形は東西に長く、ほぼ中央に位置する首都ウランバートルは北緯47度55分と稚内と同じ緯度で、ユーラシア大陸の内陸部に位置する。四季はあるが日本の四季とはかなり異なり、極寒、乾燥の厳しい自然環境である。訪問時は9月初旬であったが、昼間は24度で、朝は4度という極端な温度差であった。しかし乾燥しているせ

モンゴルの大草原



いか、体感的には20度も温度差があるようには感じられなかった。

4. 首都ウランバートル

モンゴルの人口の1/3以上が首都ウランバートルに住むという。90万人近い人々が集中している大都市であるが、決して近代都市ではない。ごつく地味な建物が目立つ上、未舗装の道も多い。車は多くあちこちで渋滞が見られたが、ほとんどが中古車である。また、タクシーが比較的多く走っているのに対し、市内で自転車を1台も見ることがなかった。この国の厳しい自然環境のせいかも知れない。

首都ウランバートルは若い人が多いそうだ。遊牧生活と都市生活では生活自体が全く異なる。若い層にとっては都市型生活の方に魅かれるのだと、若いモンゴル人の女性通訳は話してくれた。彼女は3年間日本で暮らしたことがあるそうだ。

意外にも冬の寒さはここにスモッグを発生させる。四方を山に囲まれた盆地であるため、暖房に使う石炭の煙が停滞するそうだ。しかし、9月のウランバートルの夜は信じられないほど綺麗である。生まれて初めて満天の星空というものを見てきた。

そして、ここにはマンホールチルドレンと呼

ばれる時代の変化の犠牲者がいる。民主主義に馴染めない人々が貧困化し、家庭を失い、その結果ウランバートルに集まってきた子供たちのことである。冬の極寒から逃げるために、最悪の環境ではあるものの暖かい下水道で生活しているのである。

5. 夕食会にて — 政治 —

モンゴルを知る上でとても有意義な話を聞いた。

アジア諸国の中で、内戦や暴力行為なしで政権交代ができる国は本当に数少ない。モンゴルはその数少ない国のひとつであるようだ。

モンゴルは大変歴史のある国だが、政治的には歴史の浅い国である。ソビエト連邦の崩壊に伴い1992年に、社会主義の「モンゴル人民共和国」から民主主義の「モンゴル国」へと変わり、一院制議会主義と大統領直接選挙を採り入れた新しい国としての一步を踏み出した。しかし、ここ13年間に「民主連合」→「人民革命党」→「人民革命党と祖国・民主連合」の連合政権と3回も政権与党の交代が起きている。それでも、国の政情は安定しているのである。

元々昔は部族間の争いが絶えなかった国であるにもかかわらず安定しているのは、自分たちの手で、共産党一党独裁の強制された政治から、新しい民主主義の「自由なモンゴル」を作り上げるのだという気概が国民を一致団結させているのではないと思われる。

このことは選挙への関心が非常に高いことから示されている。投票率も当然高いが、投票日は民族衣装のデールを着て正装して投票所に向かう人たちが多く見受けられるという。我々は忘れてしまった「政治を選べる自由」のありがたさを本当に大切に考えている表れではないだろうか。

また外交では、隣国の中国やロシアから常に政治的圧力を受けているにもかかわらず、一線を画した外交姿勢を貫いている。例えば、日本の国連常任理事国入りにモンゴルは賛成している。中国や韓国は陰に陽に反対に回るよう説き伏せたり圧力を掛けたが、モンゴル政府は頑として聞き入れなかったそうだ。

イラクの戦後統治に際しても、アメリカを支持してモンゴル軍を派遣した。他国に干渉されたくないモンゴル政府独自の強い政治姿勢は、国民性を表しているのではないだろうか。

6. 誇り高き騎馬民族そしてチンギス・ハーンの子孫たち

(1) 国民性

「大草原を馬に乗り自由に闊歩する。それがモンゴル男の誇り」。滞在中どこかでそんな言葉を聞いたような覚えがある。

かつて、チンギス・ハーンの子孫たちはヨーロッパから中国まで支配した。騎馬民族の強い闘争心と血の団結、そして鉄の秩序がなければこれほどの大制覇はできなただろうし、冬は零下40度の極限の自然環境の中を自由に闊歩する民族として生き抜けなかったのではないだろうか。

朝青龍が当初日本の伝統としきたりを重んじる相撲界に中々馴染めなかったのも、この大草原を闊歩するモンゴル人本来の野生の血、そして「チンギス・ハーンの子孫の誇り」がそうさせたと言えるかも知れない。勿論、好戦的な騎馬民族の血が不敗の朝青龍を作り出したという考え方も否定できないように思う。

一方、今回の訪問で沢山のモンゴルの人たちと会う機会を得たが、その多くは、本当に丁寧で素朴な心優しい人々であるという印象を受け

た。我々がそうであるようにモンゴルの人たちも日本人に対し、外観が似ていることで親近感を持っているであろうことは想像に難くない。これらのことはモンゴル人の国民性を表しているように思えた。チンギス・ハーンの子孫としての誇りを持ち、独自の信念と秩序を重んじると同時に負けることを恥とする人々。しかし、身内や自分たちの客には本当に身を粉にして礼を尽くす人々、そんな人たちのような気がしてならない。

(2) 教育

また、教育には非常に熱心である。就学率は95%で、人口250万人に対して大学が150校前後あると聞いた。特に女性の就学率は非常に高く、生徒の6～7割が女性だそうだ。教育は10年制で、そのうち8年が義務教育だそうだ。

(3) 土地の概念の違い

前述したように、モンゴルの人々の外観は日本人ととても似ている。しかし、常に移動を繰り返す遊牧民の国と日本のように定住を基本とする農耕民族の国では、考え方が全く異なる点多々ある。数年前に土地所有の法律が制定されたというぐらいだから、ごく最近までモンゴルには土地を所有するという観念が全くなかった。今でも、水や空気と同じような感覚で土地は自由と考えている人がかなり多いようだ。

またモンゴルでは遊牧民の伝統から富とか財にはあまりこだわらないそうだ。移動を常に強いられる遊牧生活には物はできるだけ少なく軽くして移動する必要があるからだそうだ。

定住生活の日本と、遊牧の長い歴史に培われたモンゴルでは生活の基本概念が大きく異なってくるのは当然だと思える。

一方、遊牧民族で常に移動しているにもかかわらず、彼らの出身地意識はかなり強い。1遊牧集団の移動範囲は約200kmと言われる。200kmと言えば、我々にとってはとても広いけれど彼らが出生地として意識しているエリア（県のようだ）はさらに広い。聞くところによると、ほとんどの遊牧民族は同じ県のエリア内を四季によって移動を繰り返すそうである。つまり、移動を繰り返しても出身地として意識している県のエリアを超えることはないということらしい。

7. 国家統計局（NSO）を訪問

モンゴル国家統計局を訪問した。本来の予定では、前日には副総理および国会議長への表敬が組まれていたが、冒頭に触れたように我々の到着が遅れたため、キャンセルされて残念であった。国家統計局は、古い無骨な建物である。しかしながら、実に見事なまでに清潔に手入れされていた。相当に古い建物だがドアの1枚1枚、廊下の隅々まできれいでチリ1つなく、ガラスには曇り1つなかった。

短時間の訪問であったが、NSOの統計局長・部長を始め警備員に至るまでの1人1人に、自分たちが新しい国を作るのだという気概を感じさせる雰囲気があった。この印象は満更間違い

訪問を祝うバナー



ではないと思う。

モンゴルの官僚制度は日本と同タイプと言える。政権が変わっても、米国のように政府の官僚が一変するということはない。既に政権与党が度々変わっていることから、官僚主導の行政と言ってよいのではないかと思う。

8. 青という色

その後中央県の統計部長と会った。県境を表す大きな石碑の前で、簡単な中央県歓迎式典が行われた。その式典に使われた絹布が「青」だった。また、ゲル（家）で歓迎を表す乾杯に使われた絹布も「青」。式典に参加した女性の民族衣装デールも「青」。ナーダム（競技大会）の相撲の衣装にも青。そして「朝青龍」の名にも青が使われている。モンゴルの人々にとって、この「青」という色は特別な色なのだろう。そう言えばハンガリーのプスタ平原の騎馬民族も青という色に特別な意味を持っているらしく、民族衣装はすべて青地の絹である。

9. 中央県

中央県ゾーンモドの町を訪問する。中央県は地理的にウランバートルを含むが、独立行政都市であるウランバートルは中央県には属していない。また、中央県の面積は74,800km²であるが、人口は僅かに10万人（ちなみに世田谷区は80万人）だそうだ。鳥取県と姉妹県である。

モンゴルでは、県知事は国会議長（一院制）から任命され、県の統計部長は県議長から任命されるが、組織的には国家統計局（NSO）に属しているようだ。正に官僚主導の中央集権の行政機構と言えそうだ。なお、国家統計局は行政ではなく、国会に属している。

10. ゴビ株式会社

(1) 経済

1990年までのモンゴルは、ソ連を中心とする社会主義圏の分業体制下で、鉱物資源と畜産物を供出する役割を強いられてきた。その結果、経済化や農業化が遅れたが、そのことで現在でも遊牧民の国という面が強く残ったのかも知れない。

現在は、中国が輸出入の40%を占める最大の貿易相手国である。その多くが、金、銀、銅、コークス、亜鉛などの鉱物資源の輸出である。市場経済に移行した現在も、中国はモンゴルの地下資源を非常に重要視しているようだ。

そして、ここ10年、質の良いカシミヤ糸が採れることから、家畜全体の3割まで山羊が飼われるようになったという。しかし、羊は草の葉の部分しか食べないが、山羊は花まで食べてしまうので、草原を荒らすことになり、問題が生じている。

また、農業化にも力を入れているが、もっぱらジャガイモ、人参、玉ねぎなど、緑黄色野菜(葉系)以外の野菜が多いようだ。緑黄色野菜が人気がないのは草原の草に似ていることから、家畜の飼料で人間が食べる物ではないと考える人が多いかららしい。

(2) 日本との関係

モンゴル政府が数少ない基幹輸出産業のひとつとして今最も力を入れているのが、カシミヤ産業である。日本が生産工場の設計から製造のノウハウ、販売まですべてを供与したのである。今や世界水準に到達したカシミヤ製品を生産するゴビ株式会社の工場が稼動中である。

ここに至るまでは日本の強い支援が不可欠であり、それがなかったらモンゴルのカシミヤ産

業はなかったと言っていたが満更おせじではないように思えた。

最近、モンゴルの平原を背景にモデルにカシミアセーターを着せた某有名アパレル産業「ユニ・・・」のTVコマーシャルをよく目にする。きっとゴビ工場に委託して生産してもらっているのだろう。ちなみに、コマーシャルの中で流れている奇妙な唸るような音は「ホーミー」と言って、喉の骨や頭蓋骨など全体を振動させて音を出すとても珍しい歌である。

日本に対しては、1990年にモンゴルが民主化した当初から、一貫して強く支援してくれた国として感謝の気持ちを持っているようだ。特に、10年前モンゴルを襲った雪害(ゾド)のときには、いち早く他国に先駆けて援助の手を差し伸べたことは、滞在1日半の間に2度も聞いたものである。

そして日本への最も高い関心はやはり「朝青龍」の角界での活躍である。モンゴル本国でも、勝敗はリアルタイムで伝えられるというモンゴルの英雄である。空港からウランバートルまでの街道にも、彼の大きな写真が堂々と飾られている。今回の7場所連続優勝が実現すればさらに関心が高まるに違いない。

11. ゲルを訪問する

中央県統計部長の案内で、代表的な遊牧民一家を訪問する。ゲル(内モンゴルではパオという)は「家」の意味である。アパートの住居もゲルと呼ばれている。40代夫婦とその父親、息子3人の計6人家族がゲルの10畳ほどの小さな空間に暮らしていた。

ゲルは木とフェルト(羊毛から作られる)で作られている。羊の餌場となる草を確保するために常に移動することが前提の生活であり、ゲ

ルは2～3時間で組み立てができる移動可能な堅牢なテントといったところである。

日本の「家」は、移動する必要がないので大きくしっかり建てられ、中の家具も同様に堅牢に作られている。一方、常に移動が強いられるモンゴルの「家」の生活では、家具や調度品は日本のそれとは比較にならないほど軽く質素である。しかしながら、とても合理的にきれいに整頓された清潔な「家」であった。

ゲルは、当然狭い空間なのでプライベートな空間はないし、とても厳格な決まりがある。出入口はすべて南側に設置されている。男性は西側、女性は東側に住み、ゲル内の通行は右回りである。

部屋のほぼ中央南寄りに暖房のストーブを置いており、夏も乳茶を出すために火を消すことはない。燃料は牛糞であるが、意外にも臭くないのである。冬の厳寒期は馬糞か牛糞を床に敷き詰めるそうだ。醗酵時に発生する熱を利用したいわゆる床暖房なのである。

訪問した時は、我々のために山盛りの多種にわたる自家製の乳製品（白い食物）を用意してくれた。

(1) 食生活 — 白い食物と赤い食物 —

モンゴルの食生活については、夏は「白い食物」、冬は「赤い食物」と言われている。「白い食物」とは多種の乳製品で、「赤い食物」とは羊肉のことである。遊牧民は家畜を飼育することで、初夏から秋にかけては、羊や山羊それから馬や牛から採るミルクから様々な乳製品を作り、それらを主食とする。晩秋から冬そして春にかけては、羊の生肉を、後には干し肉を食料とする。正に自給自足の生活である。

中国の隣国であるにもかかわらず、食文化の影響をほとんど受けていないことは不思議であ

ゲル内部（右の鍋は馬乳酒）



る。僅かに見られる影響と言えば餃子（ポーズ）とお茶の習慣くらいである。むしろ、日本の方が遥かに中国の影響を多く受けているだろう。

モンゴルの料理は羊に始まり羊に終わる。客をもてなす代表的な料理であるホイログという羊料理を食す機会を得た。羊のスペアリブの塊がたっぷり入った鍋に、塩味をベースにペッパーや玉ねぎを加えたスープを注いだところで、赤くなるまで熱した小石を幾つも中に入れ、吹き上げた蒸気で蒸し上げる。正に草原でも食べたであろうことを彷彿させる料理であった。

肉や乳製品を主食とするモンゴル人と農耕民族の日本人とでは、肉や乳製品の食べる量が違う。少量を（日本の感覚では普通の量）食べる分には、さっぱりとした塩味で日本人の味覚にも合っているのかも知れない。また、チングスカン鍋（焼肉）は日本の北海道で広がった純粋な日本料理である。

多種多様の食材に恵まれた日本の食生活と違い、実に質素で限られた食生活である。最近は大分変わってきたが、以前はほとんど野菜を取らなかったそうだ（馬乳酒など多くの乳醗酵製品は野菜不足を補完する作用があるそうだ）。

(2) 遊牧とナーダム

①遊牧と四季

羊は自給自足の手段であり、その羊のために移動を繰り返す。肉やミルクは食料とし、毛は住居の断熱壁のフェルトとして使われるのは前に述べた。しかし、意外にも羊毛の国モンゴルではセーター等の毛糸として衣料に使われることはなかった。冬の衣類は革か毛皮であり、夏は綿か絹である。なぜ毛糸が発展しなかったか分からないが、多分遊牧民の生活は常に移動が伴うため、機織りのような複雑な加工や機械は生活にマッチしなかったのかも知れない。

遊牧民は四季ごとに羊の食料の草を求めて移動を繰り返す。訪問した時期はまだとても気持ちのよい清々しい初秋(ナマル)であった。これから来るであろう冬(オウブル)の越冬準備の真最中でもあった。準備の完了する11月には日中の温度も0度近くなる。再び(オウブルの)宿営地に向けて移動を開始するのだろう。冬の平均気温はマイナス40度近くになるそうだが、乾燥した晴天が多く日本の北国の冬のイメージとは全く異なるという。

しかし、10年前に気象異変で大変な雪害(ゾド)が起り、何十万頭もの羊が死んだという話も聞いた。モンゴルを紹介する大草原の恵まれた風景は、夏から秋にかけてのほんの数ヶ月だけの間で、残りの季節は厳しい自然と向き合う日々の連続なのである。

②ナーダム(競技大会)

なみなみと注がれた馬乳酒と多種沢山の乳製品のチーズやクリーム等々の心温まる歓待の後、広大な眼下一杯に広がる草原に出た。子供たちによる競馬を見せてくれたのである。日本の競馬とはまるで違う。何キロも遠方から、こちらに向けてスタートするのでスタート地点は全く見えない。

10分ほど経って、やっとゴールにやって来るのである。近所から集まった子供たちを加え10人ほどのミニ競馬となったが、みんな真剣に競い合っていた。7月11日の独立記念日に行われるナーダムに向けて、日々腕を磨いているのだそうだ。

このナーダムは、モンゴルで全国的に開催される競技大会である。国中がこのナーダムに熱中するそうだ。老いも若きもすべて選手としてあるいは観客として参加する。日本の国体とは次元の違う、正に国を挙げてのお祭りである。競技種目は、たった3種目、相撲、競馬それに弓である。特に相撲は日本の相撲と似ていることや朝青龍の活躍もあって人気が高い。ご存知のように彼はモンゴル相撲出身であり、彼の父親はモンゴル相撲の有名な力士だったそうだ。この相撲での優勝者は、全国でその名前を知らない人がいなくなるほど有名になれ、大変な名誉だそうだ。

1日半の本当に短い滞在であった。モンゴルの歴史観、宗教観など、見聞きたいことを沢山残しての帰国となったが、短い滞在の中でも自分たちで民主主義の新しい国を作るのだというモンゴルの人々の気持ちを感じさせられた。

また、モンゴルの人々は遊牧民としての自分たちの伝統的な生活に誇りを持っており、近代的な「楽な生活」を決して羨んでいないと思えた。大自然とともに生き、自然の中で一生を過ごすことに満足し、そのことに自信を持っているような気がした。石油と電気、そしてコンクリートの中で暮らしている、あるいは生かされている我々には望めない「暮らし」と言える。「快適さ」、「便利さ」を追求するあまり、日本人が忘れかけているもうひとつの豊かさ、すなわち大自然とともに生きるという豊かさを、どうかいつまでも忘れないでもらいたいと思う。